

現代における公家文化

衣紋道山科流若宗家 山 科 言 親

はじめに

こんにちは。ただいま末松先生から即位礼の話、礼服という装束の話が出ておりましたが、私の家は代々、宮中の装束を誂えて朝廷に「調進」をして、それをお着付け「衣紋」するというのが家職でございまして、今日は歴史的な話というよりは最近の取り組みも含めて公家文化というのがどういう形で伝えられてきたのかという話と、現代においてどういうことが行われているのか、そういう事例も含めてみなさまにお話をさせていただこうと思っております。

今日は「現代における公家文化」という題でお話させていただきますが、3つのトピックを挙げております。「家の歴史と装束の文化」、こちらが私の家の一つの事例としまして公家の歴史文化について知っていただこうと。2つ目に「公家文化という視座」ですが、公家文化というものがどういう印象をもたれているか、概要、概略について触れさせていただきます。それを見ることによって現代、どういうことがいえるのかも含めてお話をさせていただきます。3つ目は「現代におけるさまざまな取り組み」ということで、最近の取り組みの実例を挙げながら、今どういうふうに公家文化が継承されているのかについてお話をさせていただきます。

1 公家山科家について

私の家は平安時代後期に始まった家として、公家の古い家は平安時代後期から鎌倉時代はじめくらいに初代を置いています。その頃に兄弟間で分かれていくわけですね。私の家は藤原氏で、辿っていくと中臣鎌足という人物までいくわけですが、平安時代後期の實教さねのりという人物から私まで数えて30代となります。家の代々の通字、名付けの字も「言」を「トキ」と読ませまして、代々、継いでいく文字になっています。私もその文字を継いで言親（トキチカ）と付いています。公家の名付けは通字を代々継いでいく家が多いわけです。冷泉家では為人さん、為理さんというように「為」という字がついたりしています。

初代の人も絵図に描かれておりまして、『承安五節絵』じょうあんごせちえという絵巻に「五節の舞姫」という舞姫を手引きしている人が實教さんということで出てきたりしますが、こういう絵図で先祖の姿をしのぶことができるわけです。そもそも「山科」という苗字も地名が京都の方は馴染みがあると思いますが、実は後白河法皇から当家は山科という所領を拝領しまして、その後代々伝領していったことで「山科」という苗字を名乗るようになっていくわけです。公家の苗字は京都の道の名前とか地名の名前が先で、藤原氏、菅原氏など、同じ一族の人が自分の屋敷のある通りの名前や所領のあるところの名前を苗字につけていくことが行われています。私の家は山科という土地を荘園の一つとして伝領したことが一つのきっかけとなっております。

2 公家の家職と役割

公家の家々によって文化的な役割が、中世以降徐々に鮮明化していきまして、私の家は装束の家、雅楽の楽器の笙を担当しますよとか、和歌だと冷泉家とか、蹴鞠だったら飛鳥井家ですよ、という形で公家の家々によって文化的な強み、役割が徐々にはっきりしていきまして家単位で役割として継がれていく、一つの家元制度の原型の形になっていくわけです。そういう家々の強みをもって朝廷に奉仕をして儀礼に参画して運営していくという形がとられていくわけです。こういう仕組み、形は、なかなか世界に類を見ないのではないかと、一つの家が家の役割として文化を引き継いでいくことはあまりないのではないかと思います。朝廷の場所があって、儀礼があり、かかわる人がいてこそ、伝わるものが沢山あるわけですが、数多くあった公家家職の中でも今でも続いているものは本当に少なくなっています。私の家のように装束の文化を続けていくことは、明治以後の大変な状況も含めて乗り越えてきたわけですが、残念ながら公家の家の方が家職を引き継いでいることは非常に少ない現状があります。

私の家は「御服調進」という宮中の装束を調進することも役割として、同時に「衣紋道」という宮中の装束を、いかにきれいに着付けていくかという知識や技術を伝えることも、私の家の重要な役割になっていきました。それが「家職」というものになっていくわけです。

衣紋道とは公家や武家の装束の着装法について古くから伝えら

れてきた技術や考え方のごとです。^{みなもとのありひと}源有仁公という方は、平安時代後期の装束が変わつたとされる時期に装束に凝つたという逸話が残つてゐることで、後世「衣紋道の祖」といわれております。装束というのは、特に正装は色や文様が非常に細やかに決められていまして、普段着はかなり自由です。正装においては色とか文様が、はっきり決まつております。例えば、石清水八幡宮の勅祭・石清水祭の参役者ですが、黒い装束を着ている人は四位以上、五位の人は赤い装束を着ているということで、それぞれの色で一目見て「この方は何位の人だ」とはっきりわかるようになってゐます。装束には社会的な意味合い、政治的な意味合いもあり、こういう細やかなしきたりが大事になります。儀式などでも着分けていくわけで、我々が衣服をTPOに分けて使い分けて着るのと同じです。

「衣紋」というのは、一人の人にお着付けする時、前後に分かれて前と後ろ二人で一人を着付けるのが男性も女性も基本になっております（写真1）。このような文化がどういふ形で引き継がれていくのか。私の家に伝承されてきた文書の中でも、特に歴代当主の日記が自筆本で残つてゐるということで知られておりました、室町時代の中頃から幕末、明治はじめくらいにかけて各歴代当主の日記が、ほぼ残つております。そういうものも一つの家職の運営の重要な情報源になっていきます。東京大学史料編纂所に私の家の日記の一部がございます。東京大学にありますので翻刻や刊行がされて、保管もすべてしていただいております。数年前に歴代の日記の原本を東京大学の松澤克行先生に見せていただきま

写真 1 衣紋の様子



所蔵：山科有職研究所

した。

例えば応仁の乱の記録なども残ってしまして、歴史的な事実を京都という場において、ずっと見続けて、記し続けていますので、日本の歴史の根柢となる原典史料として公家の日記が参照されるわけです。『言経卿記』^{ときつねきょうき}という日記には、「卯刻前右府本能寺へ明智日向守依謀叛押寄了」とあり、実際に本能寺の変の当日の記録も残っています。他には「御服調進留」という、どういう装束を、いつに承って、いつ調進したかが分かる台帳のようなものも残っ

ています。オーダーメイドですのでどういう方が、どれだけの身幅、身丈なのか、細かく寸法を書いているもの、こういった記録などが調進する時に重要な文書になっております。「天皇陛下御装束図解録」という書物では、陛下のお装束をはじめとした衣紋が、どういう形で行われるか、文字で残したり、絵図で残したりもしております。近代以降、このような形が多くなってきますが、それだけでは勿論伝わらないものがありまして、実際に着付けながら最終的には習得していかないといけません、このように着装に関しても絵入りの解説書などもつくられております。また、装束の裂帖や絵巻物のような絵画史料なども含めて、後世に参照できるものを保存しています。

ご紹介したような公家の家職もそうですが、他の家の公家の役割も含めて公家が一体何をしていたのか、なかなか実感が湧かないと思います。「天皇・公家の文化的役割」と書きましたのは、日本史ですとどういう人が治めて、どういう政治をしたかという政治史が中心になりがちで、当然政治的、経済的側面も公家にはありますが、とりわけさまざまな文化を育て、それを連綿と伝承する有機的な構造をもつ、美しく豊かな生活文化の象徴だということがいえるのではないかと。今風にいうと文化のディレクターとかプロデューサー的な役割と考えていただけたらいいのではないかと思うわけです。

「下らないもの」というのは「こんなもの、もらっても下らない」という言葉で残っていますが、上方でつくられるものは、まさに江戸に「下る」ものをつくっていた。わび、さびが日本の文

化でよく言われますが、雅があって、それをわびたり、さびたりすることで、わびさびがあるわけですから、現代は雅への視点が必要がちではないかなと思うわけです。そういう雅を担ってきたのが「公家の文化」というわけですね。

3 有職故実という叡智と仕組み

「有職故実」というのは朝廷や武家の礼式・典故・官職・法令などに関する古来の決まりのことです。まさに儀礼を運営していくにあたって重要な知識の集積をいうわけです。京都でも「有職菓子」とか「有職織物」という言葉をお聞きになることもあるかと思いますが、今でも京都に生き続ける、さまざまな工芸に影響のある包括概念といってもいいと思います。各時代で先人たちが積み上げてきた先例、判断、所作、慣習などを書き残して後世人々が立ち返ることのできる根拠となる軸を伝えるということです。先ほど末松先生のお話にあった「即位儀礼」のように、全く同じものが引き継がれていたわけではなく、常に時代に応じて、よりよい判断を行う軸をいかに伝えていくかという考え方、立場が公家の役割、考え方、生き方であるといってもいいと思うわけです。「移り行く時流を捉えながら、より良い判断を行うという姿勢」ということがいえるのではないかと思います。外国でも「文化的遺伝子 (MEME)」という言葉とか、ピスマルクの言葉で「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」という言葉がありますが、有職故実の立場は、こういう言葉でも言い換えることができ

るのではないかと思います。

4 現代における様々な取り組み

2年前に「今様」の復元奉納がありまして私も携わらせていただき、三十三間堂の千体千手観音の前で今様を歌わせていただきました。今様の「琵琶譜」の新発見ということで猪瀬千尋氏（金沢大学）が、宮内庁書陵部所蔵の琵琶譜を研究されました。今様は、これまでは文字では残っていて詩はわかったのですが、メロディはわかっていませんでした。録音の機械もなく、人づてで伝えないと伝わらないわけですが、今様のうち数曲が琵琶のコードになっており、譜面でメロディを復活させることをなさいまして、文字だけではわからない音律が復活致しました。蓮華王院(三十三間堂)で、当家の初代も後白河院の指導のもと今様を習っていたということが、『梁塵秘抄口伝集』にも載っております、後白河院の弟子として今様の評価も残っていたりします。そういう800年ぶり、900年ぶりというような、それまでわからなかった文化も、史料が残っていると、ある時いきなり立ち現れて復活したりする可能性があります。朝廷儀礼の中でも賀茂祭が復活したり、身近な例でいうと今年の祇園祭で鷹山が196年ぶりに復活したりということがあり、京都の長い時間軸の中では、いろんな史料を積み重ねながら、人々が思いを継いでいると、いつか復興したり、復活したりするということが実際に起こるわけです。

近世の公家町の地図を見ますと、御所の周りにびっしりと公家

の屋敷が並んでいました。今では、完全に松林になっていますので、こういう情景はなかなか想像できないと思います。幕末の時期には138家ほど公家がいたということで、今の京都御苑の中とその周辺に、それだけの公家屋敷が御所を取り囲んでいたわけです。同志社大学というのは公家町の跡地にある唯一の総合大学とっていいと思います。冷泉家という和歌の家が公家の完全な住宅として残り、重要文化財になっていますが、実は江戸時代の当家の邸宅は冷泉家の東隣に位置し、今の同志社大学の正門の近くに私の先祖の家がありました。今の地図と比較してご覧いただくと相国寺の前の道も変わらずあったりするわけですが、これだけの公家の家が存在していたにもかかわらず、今は冷泉家しか完全な形では残っていないということになります。

昨年、環境省の方からお声かけをいただいた、京都御苑の展示プロジェクトがありまして、江戸時代の公家をテーマにした展示パネル、公家町の再現VRの制作をいたしました。令和4年4月より環境省の京都御苑事務所内で一般公開しています。環境省京都御苑管理事務所内（旧閑院宮邸跡）で、ぜひご覧になっていたきたいと思います。江戸期の御所の街並みをCGで再現して、まさに旅しているような映像が楽しめますし、公家の文化を伝える展示パネルや、雅楽器の実物を飾ったりして、宮中の年中行事はどういうことを行われていたのかを、みなさんに視覚的に知っていただく施設を、このたび監修協力をさせていただきました。ご関心のある方は行ってみてください。

他には「おみごろも小忌衣」という装束を江戸時代までの技法で実際に復

元するというにも携わらせていただきました。即位儀礼の後に行われる一世一代の新嘗祭を大嘗祭といいますが、令和の大嘗祭の時を思い返しますと、周りに丸の内のビルがそびえたつという、古代と現代が融合した情景になっており、京都で行えば、そのような雰囲気にはならないですね。

小忌衣というのは特殊な装束で新嘗祭や大嘗祭などの神事にて選ばれた臣下が着用します。潔斎をして清浄であることを示す真っ白な装束ですが、私の先祖が昭和の御大典の時に奉仕をさせていただいた時の写真（写真2）が残っていて、着るとこういう形になります。京都に残った公家の子孫が、昭和の御大礼に奉仕しましたが、その時の写真（写真3）では「東帯」という正装の上に、さらに「小忌衣」という白い装束を着ている方が二人いるのがわかると思います。

江戸時代の小忌衣の「裂」の調査をしていきますと、いろんな

写真2 小忌衣着用姿（山科言綏）



所蔵：山科有職研究所

写真3 昭和大礼の参仕者



所蔵：山科有職研究所

技法がわかってきます。組織を拡大しますと、麻地にびっしりと濃い胡粉を塗り、その上に山藍という植物の汁を摺り込んでいるわけですが、こういった技法を江戸時代にやっているにもかかわらず、戦後はこういう技法を小忌衣に施すことがなくなってしまいました。現在、こういう手の込んだ技法は行われておりません。しかし、今でも「摺疋田^{すりひった}」という摺りを行う職人さんに頼みますと見事に、摺りができるわけです。文様や技法の歴史的背景を、しっかり文献で調べながら、打合せをして復元すると、まさに江戸時代のような小忌衣が再現できるわけです。

また、江戸時代から受け継がれている古来の品種の蚕の糸に草

木染めで糸を染めるということも近年始まっております。現代は化学染料が主流になっていますが、植物染めをした糸の再興も行われています。その活動の一環で新清和院という光格天皇中宮の小袿裂を取り上げることになりました。二階織物という、地文様が浮いていて上文様も浮くという、糸の浮いた、ふわっとした美しい光沢のある装束の裂ですが、これを実際に有職織物の帯として仕立てて復元することも行いました。この時に使った草木染めでは日本茜を使って、昔ながらの技法でどういう形でできるのかを考えながら、監修して作らせて頂きました。生地には雲菱に梅の折枝の文様が織りなされております。

5 現代における公家文化の認識

改めて京都の文化といわれて何を思い浮かべるでしょうか。日本文化の中心である京都の文化ですが、その核として、根源として存在してきたのは御所文化、宮廷文化ともいわれますが、まさに公家文化です。文化のとらえ方、分母、尺度を考える上で、宮中はずっと古代から文化の最前線に居続けたわけですから、その対象となる文化的事象はいつから始まったのか、なぜ現在の形になっているのかということを、公家文化を通して考えていきますと、身の回りの年中行事とか文化の根源をたどっていくことにつながります。

まさに文学、装束、宗教、建造物、五節句の雛人形、七夕の行事のような身近な年中行事を含めてさまざまな文物、物事という

のが宮廷文化から影響を受けているということが言えるわけです。その辺りは実は重要なことですが、個々の分野での研究者はいても、全体として一般的には知られていません。そういう意識、視点はまだまだ浸透していないのではないかと思います。

京都市のホームページで平成貴族（平成 KIZOKU）というものが出ていましたが、そういうレッテルを貼ると、公家というのは「おじゃる丸」の世界だという作られた感じになってしまい、こういうことをしていると、本当の公家社会、公家文化が一向に分からないわけです。

公家文化の現代の認識ですが、従来 of 政治史の視点で見ると、御所を中心とする京都の町が担ってきた文化的側面は、なかなか立体的に認識されにくいのではないのでしょうか。公家文化というと平安時代の『源氏物語』の世界のようなイメージが圧倒的に強くて、それ以降の時代のあり方に目を向けられることは少ないです。かつ閉鎖的で、よくわからない、自分たちに関係ない世界として、つくられた世界で覆われているのが現状ではないかと思えます。

昔は御所の周りに、一般の人々が入り出しており、行商人が入ったり、観光客が入ったり、オープンで自由な空間でした。その開放性とかいろんなものを包み込む抱容力が宮中の文化にあったからこそ、色々な文化が発展してきたのではないかと思います。

6 公家文化から考える現代の視座

例えば宮廷装束が、なぜあのような形で伝承され続けてきたのか。ややこしい形なんか、着るのも面倒くさいし、もっと楽にしたらよかったのではないかといわれるかもしれませんが、単に効率だけを考えない、それを無駄だとは捉えない、装束そのものに自然観や美意識、精神性、知恵がたくさん詰まっているからこそ、そう簡単には捨象されなかったわけです。現代はモノを単なる値段のついた物質としてではなく、精神性の宿る価値のあるものとしてとらえることが、これから重要ではないかと思うわけですが、日常に潤いや豊かさを与える大切さを考える上でも、公家文化という視座は大事になってくるのではないかと思います。

公家文化とともに発展してきた京都にとって、公家文化から窺える思想、哲学、精神性などを再認識することが、これからの時代のヒントになりうるのではないかと思っているわけです。まさに先人たちが残した知恵や文化財が息づく土壌に深く根ざした創造的な価値の可能性を、まだまだ秘めているのではないかと。私をご紹介したような事例にもありますように、記録があって、人がいて、気持ちがあれば、いろんなことが、まだまだ復活できたり、現代的な意味をもって再興することも十分に可能なわけです。京都に流れている水脈を、みなさんと眠っているものを蘇らせていく意識をもって、その本質、重要性を、ますます発信していくことが求められているのではないのでしょうか。

今日のテーマ「埋もれた「時」を解き明かす」ということで、

私の方からは、現代にどういう形で公家文化が引き継がれていて、それをどうとらえて、これから継承していくのか、というお話をさせていただきまして、私の時間を終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。